

東京人間喜劇 (Human Comedy in Tokyo) “The Japan Times” レビュー

深田晃司ならではのウィットと人物造形にあふれるデビュー作の再映

マーク・シリング

★★★★☆ 四つ星

原文 “*The Japan Times*”; <http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/ff20110729a2.html>

2011年7月29日掲載

深田晃司が2010年に発表した「歓待」“Hospitalité”は、どこからともなく笑顔で入り込んできた見知らぬ男が、とある中流家庭を大混乱に陥れる様子を描く、ブラックユーモアに満ちた喜劇である。新しい発想と魅力に溢れるこの作品は、ラスト近く皆が一行になって踊るシーンで、ややたわいのなさに流れた感もあるものの、十分に同年の東京国際映画祭で「日本映画・ある視点部門」で作品賞を受賞するに値する仕上がりであった。「歓待」は世界各国の映画祭で上映されて幾つもの賞を受賞し、現在、オーデイトリウム渋谷で上映中である。

同じくオーデイトリウム渋谷で7月30日まで上映されているのが、深田監督のデビュー作「東京人間喜劇」(英語字幕付き)。この作品は「歓待」以上に素晴らしい作品であるにもかかわらず、発表された2009年以降、殆ど観客の目に触れることがないままとなっていた。

この作品は3つのエピソードからなるオムニバスなのだが、オムニバス映画は日本では概して集客につながらない。加えて、この映画が発表された時点では、深田晃司はいくつかの短編映画で賞を取っただけの存在だったし、出演している劇団青年団の俳優たちもほとんど名を知られていなかったのである。

しかしながら、文豪バルザックの大作(そしてもちろん傑作)「人間喜劇」に着想を得て作られたというこの作品は、取り扱う主題とその取り扱い手法の両面において野心的かつ大胆、なおかつそれらがエンターテインメントに提示された仕上がりとなっている。付け加えるなら、深田はこの作品の台本を執筆するにあたってバルザックの「人間喜劇」を読み返したことは間違いないけれども、映画監督としての感性としてはエリック・ロメールにより近いと感じられた。すなわち、ロメールが長けているところの、日常生活の中での些細なドラマを洞察力とウィットをもって描き出す感性において、深田はロメールに近いところにいるのである。

ただし、深田は彼が描き出す世界に対して、ロメールよりもシニカルである。もちろん、思い違いや言い逃れの可笑しさを切れ味鋭く描写してみせる観察眼を見逃すことはできないだろう。それらは微に入り細に入り、かつ的外していない。

オムニバスの最初の作品「白猫」は、有名な即興舞踏家(岩下徹が本人役で出演)のパフォーマンスでふたりの女が出合い、舞踏家にサインをもらうためのプログラムを探して雨の中を駆け回る間にお互いについてより良く知るようになる、という筋立てである。チケットを失くして途方に暮れる女(根本江理子)は独り者のようだ。彼女に余ったチケットを渡すのは、ボーイフレンドに約束をすっぽかされた女(角舘玲奈)なのだが、彼女には、問題はあつつも、少なくとも暮らしを共にする人間が存在する。しかし、ふたりの女は、そうした表面上の違いよりもずっと大きな問題を共有し

ている。すなわち、遠くから見たくしゃくしゃのレジ袋を白い猫だと思い込んでしまうように、彼女たちには真実が見えていない(あるいは、見ようとしていない)のである。

第2話の「写真」に登場するアマチュアカメラマンの春菜(荻野友里)は、意気揚々と彼女の初めての個展の準備に取り掛かるが、友人の結婚披露宴が個展初日のレセプションの時間と重なっていることが分かる。春菜は何とかやりくりをしてその場をしのごうとするのだが、そこで展開するのはありがちな「間違いの喜劇」ではなく、芸術性と商業性を同時に成り立たせることの難しさを描く、可笑しくも救いのない物語である。その難しさは、食卓に御馳走を並べて大衆を呼び寄せれば解決する、という手合いのものでは決してないのだ。

最終話の「右腕」はこのオムニバスの中で最も奇妙な作品である。第2話で結婚式を挙げた正樹(山本雅幸)とジュン(井上三奈子)の新婚生活が落ち着いてきた頃。ジュンが来たるべき出産に向けて準備をしているさなかに、正樹はトラックに轢かれ、緊急手術で右腕を失う。通常の日本の医療ドラマであればこの夫婦は涙を流して艱難辛苦を耐え抜くのであろうが、この物語は正樹の「幻肢症」の治療に焦点を当てていく。

ここでも、登場人物に固有のジレンマが、より普遍的な問題への暗喩として作用する。怪しげな医師(志賀廣太郎)の助けを得て、正樹は自らの脳に、切断した右腕が今でも存在するかのように信じ込ませようとする。そうやって、固く握りしめたまま痛みを生じさせている「実際には存在しない」右の拳を開こうとするのだ。同じことが実はこの夫婦の関係にも当てはまることに、観客は思い当たる。互いの嘘がグロテスクな生を得て勝手に動き出し、予想もしなかった結果を生み出すのである。

これら3つのエピソードは、主題に沿って束ねられているだけでない。登場人物もまた、エピソードを超えて重なり合っている。全体としてはもちろん一繋がりのお話としてきちんと組みあがっているけれども、同時に、深田の意図はありがちな一連の物語を紡ぐことにとどまっていない。彼の意図は、個々のエピソードを独立した物語として提示しながら、それらが自然に共鳴しあうよう仕向けることにある。それはあたかも、池に生じたいくつもの波紋がぶつかり合って新しい紋様を創り出す様なものである。

こう書くと、「東京人間喜劇」がバルザックに禅のテーストを加えた作品であるかのように思われるかもしれないが、実際にはこの作品はそれ以上の、一種ハイブリッドなものに仕上がっている。すなわち、その手法においては典型的な日本のドラマよりもむしろヨーロッパのアートシアターであり、しかし、何よりも、最初の一コマから最後の一コマまで、この映画は、飽かすことなく、紛うことなく、深田晃司の個性に溢れているのである。

翻訳:小畑克典

東京人間喜劇

★★★★☆ 四つ星

2009年に発表された深田のデビュー作は今見返してみても新鮮な「歓待」で観客を迎え入れる。英語字幕付き。

監督: 深田晃司

上演時間: 139分

上演言語: 日本語